

## 親の死に目と国土

加藤浩徳（東京大学大学院工学系研究科・教授）

私事であるが、先日、父が他界した。夏の暑い日だった。お盆休み中だったが、新型コロナ感染を恐れ、帰省せず都内の自宅で本を読んでいたところ、午後2時半頃、突然実家の母から電話があった。父の入院している病院から、危険な健康状態にあるとの連絡を受けたという。父は、脳梗塞で昨年倒れて以降入院しており、何度か危険な状態の知らせを受けてはその後持ち直していたため、今回もそうなのだろうと高をくくっていた。しかし、午後4時すぎに再度母から電話があり、ついに父が息を引き取ったとのことだった。覚悟はしていたものの、実際に父が死んだという知らせはショックだった。と同時にすぐに実家に向かわねばならない、と頭をフル回転させ始めた。ちなみに、私は長男である。

私の実家は、奈良県にしては比較的交通の便の良い奈良市内にある。連絡を受けてまず考えたことは、通夜がどうなるか、ということであった。もし今日中に行われるということならば、大急ぎで帰省しなければならない。しかし、どう考えても自宅から実家に到着するまでに3時間はかかりそうだ。とても通常の通夜が始まる時刻に実家に到着できるとは思えない。そう考えると、おそらくその日のうちに通夜が行われることはなく、きっと翌日以降になるだろうという結論にいたった。そこで、少し気を落ち着かせて、礼服や1週間分の実家滞在のための準備を整え、近くの銀行ATMで現金を引き出し、ようやく午後6時前に自宅を出ることができた。果たして、実家に到着したのはその日の午後9時半頃であった。

さて、このように事細かに父の死とその後の私の行動について記述したのは、今回の一連の出来事を通じて、我が国の交通のあり方について考えさせられることになったからである。たまたま、昨年度から始まったある研究会で、2050年の公共交通のあり方について検討する機会があった。私は、特に都市間交通を担当しているため、研究会メンバーとともに我が国の都市間交通システムのあり方について議論をしていたのだ。その中で、メンバーの一人から「都市間交通ネットワークは、せめて親の死に目に会える水準を維持すべきである」という主張があったのを強く思い出すことになったのである。確かに、たとえ全国のどこにいても、自分の親の死に目には間に合うくらいの交通サービスを国として保証すべき、という主張は心に響くものがある。私の場合は、東海道新幹線という我が国の誇る高速交通手段があったがゆえに、昼過ぎに危篤の知らせがあってもその日のうちに実家に帰ることができた。ただし、結果的に、親の「死に目」には間に合わなかった。文字通り「親の死に目に間に合う」というのは、実は、相当難しいことなのかもしれない。

たまたま私のケースは、自宅と実家とがたかだか400km程度離れているだけであった。しかし、もっと遠距離に両親が住んでいる方々はたくさんいるはずであろう。ご高齢の親を持つ方は、どうやって親の安否を確認し、いざとなったら親のもとへ急行できるかと日頃から悩んでおられるかもしれない。特に、自宅と実家とがともに地方の場合には、直行航空便や新幹線ネットワークがないことも多い。人口減少下の我が国において、中長期的には、現在の都市間交通サービスの維持が困難になるだろうという意見も耳にする。親の死に目は無理でも、せめて「通夜」には間に合う程度の都市間交通サービスがないと、人としてまともに暮らせる国とは呼べないのではなかろうか。それとも、実家から遠く離れて暮らす自分の親不孝を責めるべきなのだろうか。地方出身で親元から遠く離れて暮らす多くの人々の姿が目に浮かんでいる。